産経新聞　＜第三種郵便物認可＞

不登校経て見つけた夢

山形の中３ 医師伴走でカウンセラー目指す

全国の小中学校で令和３年度に不登校となった児童生徒は24万人を超えた。山形県の中学3年の女子生徒はこの間に経験した不登校を経て、スクールカウンセラーになるという夢を見つけた。支援する児童精神科医、成重竜一郎さん(48)は成長を温かく見守っている。

2年だった3年夏、部活動でトラブルが起きた。先生には「あなたが我慢すれば楽なのだけど」と言われ、同級生からは無視されるように。「心がぽっきりいっちゃった」。3年10月から、学校に行けなくなった。

母親は「すぐに戻れる」と考えたが、リストカットや家出を繰り返す女子生徒に焦りを募らせた。「制服を着た子を見ると『なんでうちの子が』と胸が締め付けられた」と振り返る。

近所の小児科医らに勧められ、女子生徒はカウンセリングに通うことになり、4年1月、山形市内の児童思春期外来で診療する成重さんと出会った。周囲の大人と違い、言動を否定せず「あなたは今の時点で百点満点」と言ってくれた。女子生徒は「『大丈夫』と言われたようで、自分を責めることが減った」と語る。

母親も一緒に通ううちに「上からではなく同じ目線で娘と向き合おう」と考えるようになった。親子で月に1回程度のカウンセリングを重ね、短時間や別室で登校できるようになり、4年夏からは元通りになった。

女子生徒にとって、子供の心を支える仕事に憧れを持ったことが大きかった。身近にいて相談に乗れるスクールカウンセラーが夢になった。学校は「行かなきゃいけない場所」から「夢をかなえるために必要な場所」に変わった。

成重さんは、不登校になった後で「やりたいこと」や「なりたい大人」がないため、再び学校に行く理由が見いだせなくなる子が多いと感じている。不登校を特別視せずに対話し、ささいなことでも何かを見つけたら「行きたい方向に進んでみたら」と背中を押しているという。

記者は4年10月、女子生徒に対するカウンセリングを取材した。「リラックスの仕方が分からない」「頑張りすぎてしまう」と話す女子生徒。成重さんは友人のように優しくうなずく。会話が弾むにつれ、女子生徒の表情が明るくなるのを感じた。

女子生徒に誘われ、翌月、学校での合唱コンクールを取材に行くと、生き生きとした表情で歌う姿が見られた。「不登校があったから今の私がある。苦しんでいる子を少しでも救いたいな」。まっすぐな瞳が印象に残った。

成重竜一郎医師のカウンセリングを受ける女子生徒と母親（手前）＝令和4年10月、山形市

■不登校

文部科学省は、対人関係のトラブルなどで、１年で30日以上欠席することを不登校と定義する。病気や経済的理由は含まない。同省の問題行動・不登校調査によると、全国の国公私立小中学校で、令和３年度の不登校の児童生徒は24万4940人（前年度比４万8813人増）となり、20万人を超えたのは初めて。理由は「無気力・不安」が最多の49.7％、「生活リズムの乱れ」が11.7％、「いじめを除く友人関係」が9.7％と続いた。新型コロナウイルス禍の影響も指摘される。